

題名 「職場体験で学んだ思いやりと笑顔」

氏名 今川 美空

「思いやり」この言葉を、皆さんはどう受け止めますか？ 私は今まで、この言葉には少し、あきあきしていました。大人達はいつも二言目には思いやり。そんな言葉が、実は少し嫌いだったりしました。しかし、6月の終わりごろ、その考えは一変しました。

私は職場体験で、デイサービスセンターへ行かせてもらうことになりました。私は、体験先では絶対に、「思いやり」とか「気配り」とか言われると思っていたいました。当日、思いやりとか言われなくても正直何をやればいいのか分からないし、そんなこと言われるの、嫌だな。と、楽しみと不安を抱えながら、デイサービスセンターへと向かいました。あいさつ、自己紹介も終わり、仕事を始めました。優しく仕事を教えてくれる職員の方達は、「思いやりを持って行動しろ。」とか「思いやりの心を大切にしろ。」とか。そういう言葉は一切使いませんでした。そう。耳にはそういう言葉は聞

こえませんでした。代わりにそれを聞き取ったのは、私の目でした。

私の目の前には、自分の精一杯を相手に一生懸命にぶつけようとする人達がいました。それは、優しく笑いかけたり、楽しくお話しをしていたり。やっていることは今、私達がやっていることなのに、全然違うことをしているように感じました。それはたぶん、私達が一生懸命やっていないから。という問題ではない気がしました。気持ちの問題なのだ。そう思いました。職員の人達は一つ一つの行動が優しくって、一生懸命で、それこそもう、「思いやり」以外の何もものでもない。私は思いました。

私にはもう一つ。目を見張るものがありました。それは、利用者さん達の「笑顔」です。私は勝手に、もうダイサービスセンターへ行くくらいの人達だから、何も反応してくれないんだろかな。と思い込んでいました。しかし、目の前の人達はどうかだろう。言葉からも、行動からも、嬉しさというものがにじみ出て、それがひしひしと伝わってきました。初対面の私達を、「可愛い」と

言い、かわいがってくれろ」老人もいました。学校では見られない、きれいな笑顔を私達に向けてくれました。そんなに笑顔になれるのは、やっぱり、職員の方々が日々、頑張っているおかげで、デイサービスが活気づき、自然とそこが楽しい所。になっているからなんだと、私は気がつきました。

私は、この職場体験で、「思いやり」の本質をかいま見た気がします。それと同時に、思いやりが笑顔を生んで、また、笑顔が思いやりを生む。そう気づいたのでした。そして私は、「思いやり」という言葉がすこし好きになりました。その言葉は少しだけ、私を大人へと近づけてくれました。思いやりは沢山、優しい世界を見せてくれました。私はこの、思いやりがあふれるデイサービスセンターが大好きになりました。

題名 「介護の意味を考える。」

氏名 小林 さくら

私が、この作文を書こうと思った理由は、介護福祉士に興味があるからです。私が介護福祉士に興味をもったきっかけは三つあります。

一つ目は、あるまんがです。そのまんがには介護福祉士が出てきました。また、介護福祉士ではないけれど、介護が必要な車いすの友人を支え助ける人物も出てきました。このまんがを読んで、その介護福祉士の仕事や、車いすの友人を支え助けた人物の姿が印象的で、すごいな、こんなすてきな仕事があるんだな、と思いました。

二つ目は、私の姉です。私の姉は、介護福祉士や理学療法士に興味があるらしく、そのような仕事の本をかりていたので、私も見せてもらいました。その本を見てみると、仕事の大変さも分かったけれど、その仕事のやりがいや良さも分かりました。

三つ目は、私のおばあちゃんです。私のおばあちゃんはもう七十代後半です。三ヶ月ほど前は

入院していたし、最近では足やこしが痛いと言っているときがあるので、心配です。洗たくや皿洗いなど、私に出来ることは出来るだけしてあげたいな、と思っっています。おばあちゃんをしっかりと助けて、負たんがなくなるようにしたいです。

また、最近では少子高齢化が進んでいます。おじいちゃんやおばあちゃんが多くなるにつれ、子供が減っていくと、介護をする人も少なくなってしまうと思います。介護福祉士が少ないけれど、介護施設に入所するおじいちゃん、おばあちゃんが多いとなると介護福祉士の人数不足により充分な介護を受けられなくなるのではないかと思えます。

そして、介護の仕事はおじいちゃん、おばあちゃんのお世話だけではありません。作業療法士という仕事があります。作業療法士とは、病院や障害者福祉施設、発達障害者施設などで働くリハビリテーションの専門家です。このような仕事では、身体の障害のリハビリテーションだけではなく、精神に関するリハビリテーションも行います。

介護と聞くとほとんどの人が、お風呂に入れたり着替えをさせたりする仕事を思い浮かべると思います。しかし、このようなことは生活の一部の手助けをしているにすぎません。

つまり、介護の仕事というのは身体の世話をするだけではなく、精神的にもケアして、支えていくことなのです。

題名「やりがいを感じれる介護の仕事」

氏名 蔵谷 希愛

みなさんは、介護はどのようなものだと思いますか。私は介護とは、病気などで体の不自由な人などを支える仕事だと思っています。最近では、保育所や小学校がなくなるいっぽうで、介護施設が増えてきていると思います。介護といってもいろんな種類のもがあります。その中でも認知症の人について説明したいと思います。認知症は、つい最近のことを忘れてしまったり、自分が置いた場所や人の名前などを忘れてしまおうといった病気です。私のおおばあちゃんも認知症なので、同じことを何度も聞いてきます。例えば今日の日付けや学校があったかなどです。話していると三分に一度くらいのペースで同じことを聞いてくるので、「さっきもゆったやろ。」と言いたくなることがよくあります。しかし本人は聞いたことを忘れているので、「さっきゆったやろ。」などと言われると、孤独を感じるそうです。また、忘れてしまふことその他に、急に怒り出すこともあります。

しかし、自分が言った後に周りからの指摘を受けると、自分が言ったことを憶えていないため、何も悪いことをしていないのにこの人は怒っているのとらえてしまうのです。もう一つ例を挙げると自分の物を置いた場所を忘れてしまうのです。そのため、自分の大切なものがなくなると関係のない人を疑ってしまい、言い合いになってしまうのです。このようなことをさけるにはどうしたら良いのでしょうか。介護をしている側は、もし自分がこのようになったときにどうして欲しいか考えてみるはどうでしょうか。自分もいつかは介護される日が来るのです。その時、何を言っても怒ったような態度で返されたら嫌だと思えます。だから、同じことを何度も聞かれても、初めて聞かれたかのように優しく返し、みんなを笑顔にしながら介護をしてくれる人がいたら、みんなが嬉しくなれると思います。介護をする人は、病気などで体の不自由な人を支え、信頼関係を築き、みんなを笑顔にし、生きる勇気をあたえなければいけないとても大変で苦勞する仕事だと思います。介護の仕事をしている人に聞いてみ

ると、お年寄りの場合は分かりやすいように耳元でしゃべったり、口を大きくあけてしゃべったり、ジェスチャーなどの動作を大きくして会話しないといけなくて大変ですが、お年寄りの笑顔や楽しそうにしている顔、「ありがとう。」と言われるととても嬉しくなり、介護という仕事をして良かったなと感じることができそうです。つまり、介護という仕事は、コミュニケーションをとることの大変さも知り、コミュニケーションをとることによって人を笑顔にできるといってもやりがいを感じることのできるという良い仕事だと思います。だから私も身近な人に接する機会を増やし、たくさんの人を笑顔にできるといいたいと思います。介護を楽しくし、たくさんの人に希望をあたえられる人が増えていけばいいなと思います。

題名 「介護の楽しさを広める」

氏名 中村 華

私は、二年生の夏休みに、ワクワクという、仕事体験の企画で、家の近くの老人ホームへ体験に行きました。初めは、そんなに興味がなかったし、あんまり行きたくなかったけど、行ってみると、予想外のことだらけで、「介護」に興味をもつことができて、体験は三日間だけだったけど、とても思い出になりました。この作文を読んで、興味をもつだけでも、嬉しいと思います。

行く前「老人ホームって言うくらいやから、ボケたお年よりだらけで、楽しいゲームとかできなさそうやな」と思って、全然楽しみではありませんでした。でも、行ってみたら、相手から話しかけられたり、いろいろ聞かれて、とても会話がはずんで楽しくなっていました。初めは、大きい声で、知らない初対面の人とお話しをすること耻かしがって、全然大きな声で話せなくて、話ができなこともありました。でも、年をとるって、こういうことなんだと理解できるようになって、

れたと思います。お年よりの中には、ずっとさけんでいる人や、不思議なことをしている人がいたけど、「怖い」という思いをすてて、「しようがない。」と思うと、優しく接することができるといふようになりました。多分、みんなが思っているより、お年よりは良い人達だらけなんだろうなと思います。それに気づいたのは、ある三つの出来事があったからです。

一つ目は、カレーライス作りを一緒にしたことです。私自身、包丁を持って、料理をしたことが無くて、ジャガイモを大きく切りすぎたときに、「かしてみなさんな。」と行って、一瞬で細かく切って「どんなもんだいっ。」と言って、微笑んだときです。その優しさに、ちよつと申しわけなさを感じました。ずっと、介護を悪く見ていたなと。

二つ目は、一対一になって、お話しをしたことです。きっとそのときは、同じことを七回言っていた気がします。でも、なんだかすごく楽しくて、ずっと笑ってお話しをしてくれました。その笑顔が今も忘れられません。

三つ目は、おわかれのときです。ある一人の方

が、「わしらは、もうボケてもうて、いろいろ覚えとらんけど、あんたらのことは忘れんよ。絶対忘れんよ。」と言われたときです。涙が出てきました。その言葉が胸に突き刺さって、ここに来てよかったです。出会えてよかったと思いました。明日には忘れていかもしれないし、ずっと覚えていくれるかはわからないけど、すごく、覚えているし、不思議な感情でした。

初めは、「介護」なんてどうでもよかったです。でも、三日間、一緒に暮らしていくうちに、楽しくなっていきました。すっごく、自分の成長につながったなと思います。一緒に住むひいおばあちゃんも、八十を越えて、認知症が進んでしまっているけど、嫌がらず「笑顔」にできるように、たくさん関わっていかうと思います。